総　説

# メンタルモデルに関する研究の動向
## －看護学および看護学教育への示唆－

# Trends in Mental Model Research: Implications for Nursing Science and Nursing Education

内藤知佐子[1)]，澁谷　　幸[2)]，中岡亜希子[3)]，
船木　　淳[4)]，内山　孝子[2)]，前川　幸子[5)]
Chisako Naito，Miyuki Shibutani，Akiko Nakaoka，
Jun Funaki，Takako Uchiyama，Yukiko Maekawa

キーワード：メンタルモデル，文献レビュー，言語化

**抄　録**

本研究は，メンタルモデルに関する研究の動向を調査し，看護学および看護学教育への示唆を得ることを目的とした。医中誌Webおよびハンドサーチにて文献を収集し，計９件の文献を対象とし分析した。９件の文献は，３つに分類をすることができた（メンタルモデルに影響を与えるものに関する研究，メンタルモデルの共有／チームのメンタルモデルに関する研究，メンタルモデルへの介入に関する研究）。不適切なメンタルモデルが指導者に適用されている場合，指導者自身が適切だと思い込むと新たな情報取得が行われない可能性が示唆された。メンタルモデルは指導者の経験や役割等からも影響を受けるため，指導者が他者との対話を通して言語化を図り，自身を省みる機会が必要であること，ロールプレイやシミュレーションを通してメンタルモデルの変容を促すことで，豊かな学習環境の整備につなぐことが示唆された。

受付日：2025年10月30日　　受理日：2026年３月１日
1）愛媛大学医学部附属病院　総合臨床研修センター
2）神戸市看護大学　看護学部
3）神戸女子大学　看護学部
4）名古屋市立大学大学院　クリティカルケア看護学分野
5）甲南女子大学・看護リハビリテーション学部

# Ⅰ. はじめに

メンタルモデルとは，1980年代頃から認知科学や認知心理学の領域で見られるようになった言葉であり，「心の中にある外界の事物のモデル，または心自体」（錦見，1988）や「人々が行動を記述し，説明し，予測するために必要とされる組織化された知識フレームワーク」（池田，2012）と定義されている。Peter M. Sengはメンタルモデルについて，「But what is most important to grasp is that mental models shape how we act.」（Peter M. Seng，1992）と述べ，「私たちがどのように世界を理解し，どのように行動するかに影響を及ぼす，深く染み込んだ前提，一般概念であり，あるいは想像やイメージ。（Peter M. Senge，2011，p.41）」で，「私たちがどう世界を理解するかだけではなく，どう行動するかも決定する。（Peter M. Seng, 2011，p.241）」と説明している。つまり，メンタルモデルは個人の意思決定や行動に影響を与える思考の「前提」や「心の枠組み」であり，「～すべき」や「こうあるべき」といったイメージや固定観念，思い込みのことを指している。

昨今，医療安全の領域においては，チーム成員間でメンタルモデルが一致していないことがインシデントの背景にあることが報告されており（小野澤ら，2000），医療安全講習会では，アメリカで開発された医療安全トレーニングTeam Strategies Tool to Enhance Performance and Patient Safety（以下，Team STEPPS®とする）のなかで，メンタルモデルを共有することの重要性が報告されている（盛田，2024）。

看護教育の場においても，臨地実習指導者（以下，指導者とする）や教員がどのようなメンタルモデルを持っているのかが重要であると考える。先述したように，メンタルモデルは個人の意思決定や行動に影響を与える「前提」や「心の枠組み」を指す概念である。つまり，患者への関わりはもちろんのこと，学生指導や新人教育などの場面においても同様に，メンタルモデルが指導者や教員の意思決定や行動に影響を与えることが推察できる。メンタルモデルが指導者や教員間で一致しない状況下において実施される指導は，非効果的な指導になる可能性が予測される。限られた時間のなかで効果的な指導につなぐためには，指導者や教員がどのようなメンタルモデルを持つかを互いに共有することが欠かせないと考える。今回は，本邦におけるメンタルモデルに関する研究の動向を調査し，看護学および看護学教育への示唆を得ることを目的とした。

# Ⅱ. 研究目的

本邦におけるメンタルモデルに関する研究の動向を調査し，看護学および看護学教育への示唆を得る。

# Ⅲ. 研究方法

## 1．文献検索方法および対象文献の抽出

文献検索は，Web版医学中央雑誌Ver.5（以下，医中誌とする）を用いて行った。検索期間は，メンタルモデルという言葉が認知科学や認知心理学領域で登場するようになったのが1980年頃であったため，医中誌の収録開始となる1987年から2025年とした。検索日は2025年10月１日であった。

医中誌の検索では，「メンタルモデル／TH orメンタルモデル／AL」という検索式を用いて検索し，タイトルまたは抄録に語句が含まれるものを対象とし，論文種別は，原著論文，研究報告，実践報告，短報，会議録とした。さらに追加で，ハンドサーチを行った。

包含基準として，言語は日本語であること，目的・方法・結果・考察が明記されている文献に限るとした。除外基準は、日本語以外の文献とした。

対象文献の抽出フローチャートを**図１**に示す。メンタルモデルに関する文献は，キーワード検索により42件が抽出された。内容を精査し，重複文献１件および“セグメンタルモデル”など他の言葉でヒットしていた文献３件を削除した。さらにハンドサーチにて６件の文献を追加し44件となっ

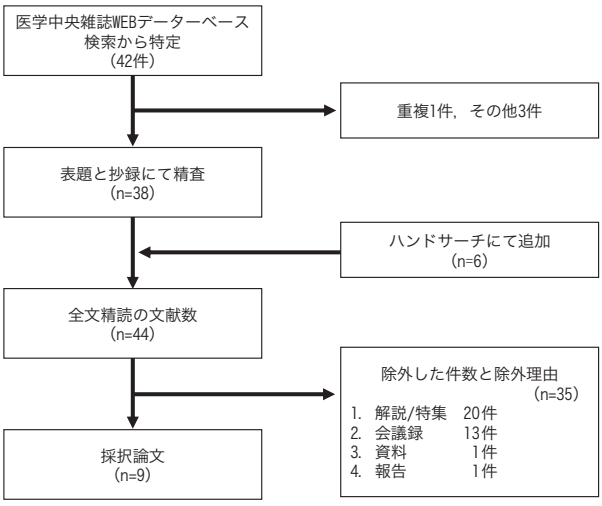


図１　対象文献の抽出フローチャート

た。その上で，包含基準と除外基準を照らし合わせ，本研究の対象文献として計９件を採択し検討した。

### ２D　分析手順

まず，該当した文献数の推移と論文種別について概観し，その特性を整理し，順に文献番号を付与した。つぎに，メンタルモデルに関する研究の動向について，該当する文献から関連する記載内容を抽出し分類した。

### ３D　倫理的配慮

対象文献の内容抽出においては，文献の論旨や文脈が損なわれないよう抽出することに努めた。

## Ⅳ．研究結果

### １．メンタルモデルに関する文献の概観

対象文献は，計９件だった（**表１**）。最も古いものは2008年（１件），ついで2012年（２件），2015年（１件），2017年（２件），2019年（１件），2020年（２件）だった。また，対象文献９件のうち患者や医療職，インシデント報告などを対象とした医療系の報告は４件のみ，その他は大学生や社会人，保育士やシルバー人材センターに登録された人を対象としていた。

### ２．主要な９題のメンタルモデルに関する研究の内容別分類

今回対象となった９件の論文を内容別に分類した結果，1)メンタルモデルに影響を与えるものに関する研究４件，2)メンタルモデルの共有／チームのメンタルモデルに関する研究４件，3)メンタルモデルへの介入に関する研究１件の計３つに分類できた（**表１**）。それぞれの概要を，以下に説明する。

**1）メンタルモデルに影響を与えるものに関する研究**

上山，杉浦（2020）は，３歳から５歳児クラスまでの担任及び副担任の経験がある保育者を対象に，乱暴な幼児と内気な幼児の事例をもとに半構造面接を行い，保育者の実践的思考をより深く理解し，保育の質を高めるための理論的基盤として「メンタルモデル」を捉えようとしている。その結果，事例に共通した３つのカテゴリーとして【年齢に応じた発達段階】【園生活を通じた成長期待】【子ども情報の吟味】が明らかとなった。また，乱暴な幼児では15の概念，内気な幼児では12の概念が生成された。保育者は，子どもの外面や内面，その背景を捉えながら【子ども情報の吟味】を行っていた。ただし，ここには偏見が入る余地があるため，保育者は【年齢に応じた発達段階】を捉えることで子どもを客観的に見ようと心掛け，また【園生活を通じた成長期待】を持つことで深い対象理解につなげ，今後の子どもへの関わりや支援の方向付けをしている様子が明らかとなった。今回は，保育経験による大きな違いは見られなかったが，子ども理解につながる３つのフレームを意識することで子ども理解の構造化が図りやすくなり，メンタルモデルが醸成しやすくなることが期待された。

池田（2012）は，チームのメンバー間の相互作用が強く求められるチームとしてラクロスを挙げ，大学生の女子チームを対象に研究を実施した。池田の仮説によると，チーム力やチーム・リーダーシップがチーム・メンタルモデルへ影響し，ひいてはチーム・パフォーマンスを高めるのではないか，というものである。質問紙と尺度を用いてチーム力とチーム・メンタルモデル，チー

表１　主要な９題のメンタルモデルに関する研究の内容別類

| 著者名 | 主題 | 研究目的 | 研究対象者 | 研究デザイン | 分類 |
|---|---|---|---|---|---|
| 上山瑠津子 ほか（2020） | 保育における子ども理解のメンタルモデル | 保育者が子どもに関わる際に子ども理解の視点はどのように関連し合いながら理解に至るのか，子ども理解の認識枠組みであるメンタルモデルを明らかにする | ３歳児から５歳児クラスまでの担任または副担任の経験がある保育者33名 | 質的研究 | ①メンタルモデルに影響を与えるもの |
| 池田浩（2012） | チーム・メンタルモデルおよびチーム・パフォーマンスを規定する要因に関する検討：チーム力およびチーム・リーダーシップの効果 | チーム・パフォーマンスに先立つチームメンタルモデルを規定する要因を明らかにするために，チーム力およびチーム・リーダーシップの効果について検討する | 日本学生ラクロス連盟九州地区に属する女子大学生の11チーム，計302名 | 量的研究<br>質問紙法 | |
| 土井俊央 ほか（2012） | 操作時のメンタルモデル構築要素についての一考察 | メンタルモデルの構築への関わりを示唆された９つの要素に基づいて，ユーザーインターフェース操作におけるメンタルモデル構築に関わる要素とそれらの関係性を検討及び考察すること | 社会人と大学生の男女19名<br>（男性：11名，女性：８名） | 実験研究 | |
| 北島宗雄 ほか（2008） | 高齢者を対象とした駅の案内表示のユーザビリティ調査　認知機能低下と駅内移動行動の関係の分析 | １回目：「利用したことのない駅で移動する」という場面において，高齢者が遭遇するユーザビリティの問題を認知機能の能力の観点から理解すること<br>２回目：認知機能の低下が駅における移動行動に及ぼす影響をさらに詳しく理解する | 首都圏の社団法人シルバー人材センター登録の男女<br>１回目：168名，２回目：154名 | 実験研究 | |
| 松本順 ほか（2019） | 救急医療に必要なノンテクニカルスキルの類型化 | 救急医療に必要とされるノンテクニカルスキルのカテゴリーを調査・同定し，今後の教育及び診療でのフィードバックに活用する | 2012年１月より2016年９月までの院内のインシデント報告システムから，発生場所が救急外来もしくは救急診療に関連する部署での報告を抽出 | 後向き<br>コホート研究 | ②メンタルモデルの共有/チームのメンタルモデル |
| 村上成明（2017） | 看護師がクリティカルパスを理解していく過程とナレッジマネジメントの関連性　パス使用経験１年の看護師に焦点をあてて | パスの理解を構成している概念を明らかにし，それらとSECIモデルの関連性を分析することで，パスのリテラシー向上につながるパス教育の方策を検討する | パスを使い始めて１年と１～３か月経過した看護師７名 | 質的研究 | |
| 仲田紀彦 ほか（2017） | 頸椎椎弓形成術クリニカルパスの運用上の問題点と解決策　患者満足度向上と術後在院日数コントロールの両立の工夫 | 頸椎椎弓形成術クリニカルパス運用上の問題点および解決策を検討する | 2009年12月～2016年10月に行った棘突起縦割法頸椎椎弓形成術228例<br>(男性157例，女性71例，平均65.5歳) | 後向き<br>コホート研究 | |
| 新田京子 ほか（2015） | 周産期チームのチーム力を高める試み | チームSTEPPSのツールを活用できるように教育活動を行ったので検証した | トレーニングに参加した周産期チームの職員 | 量的研究<br>教育・研修方法と効果 | |
| 中嶋美知 ほか（2020） | NLPのメンタルイメージと知覚位置を用いた，失敗恐怖軽減と自己受容の改善研究 | 漠然とした失敗への恐怖の軽減 | 社会人の男女<br>実験群236名<br>（男性：76名，女性：160名）<br>統制群105名<br>（男性：28名，女性：77名） | 介入研究 | ③メンタルモデルへの介入 |

ム・リーダーシップ，チーム・パフォーマンスについて調査を行い，統計処理をした結果，チーム力は直接的にチーム・パフォーマンスに規定するだけでなく，チーム・メンタルモデルの形成を促進している様子が明らかとなった。また，チーム・メンタルモデルが形成されることで，チーム・パフォーマンスの向上にもつながることを述べている。

土井ら（2012）は，社会人と大学生の男女19名を対象に，メンタルモデルの構築への関わりを示唆された９つの要素に基づいて，ユーザーインターフェース操作におけるメンタルモデル構築に関わる要素とそれらの関係性を検討及び考察することを目的に研究を行った。その結果，７つの要

素（プランニング，状況の理解，概念の形成，メタファ，フィードバックの検討，システムの振る舞いの予測，システムの要素間の相互作用）が関わっていることを絞り込んだ。メンタルモデル構築にあまり関与していないと考えられたのは，表示の理解と操作記憶の想起だった。

北島ら（2008）は，高齢者を対象に初めて利用する駅で高齢者が遭遇するユーザビリティの問題を認知機能の能力の観点から理解することを試みた。その結果，注意機能があるもののプランニング機能が低下している場合は，２つのパターンに分かれた。まず，メンタルモデルがあるときには，表示を見ないことが明らかとなった。次に，メンタルモデルがないときには，何を見つけるべきかが定まらず，その結果不要な情報を取得するのみとなり，課題達成のための情報取得ができずに迷うという現象に陥っていた。また，プランニングと注意機能の双方が低下している場合には，ゴールの設定があいまいとなり，案内表示からの情報の取得が十分になされず迷うことが明らかとなった。この研究のなかで北島は，「不適切なメンタルモデルが適用されている場合にそれに気づかない可能性がある．これは，適切なメンタルモデルを適用していると思い込んでしまうと，情報取得をあまり行わないからである.」（北島ら，2008）と述べている。

**2）メンタルモデルの共有／チームのメンタルモデルに関する研究**

松本ら（2019），村上（2017），仲田ら（2017），新田ら（2015）は，メンタルモデルの共有がチーム力を向上させることやチーム医療につながることを明らかにしている。そのなかで，村上（2017）は，「各看護師が抱く無形のメンタルモデルをパスに有形化して共有することが専門性の共有となり，（中略）暗黙知を形式知に変換したり，翻訳したり，概念として示す過程で，それらを共通の言語に擦り合わせるとともに，実践可能なものとして表現していくことで，言語による集団的内省を引き起こし，集団的な自己超越に至ることが重要である」と述べている。

新田ら（2015）は，チームでメンタルモデルを共有する方法としてTeam STEPPS®（医療の質・安全・効率を改善するエビデンスに基づいたチームワーク・システム）を推奨している。Team STEPPS®は，アメリカで開発された医療安全トレーニングである。種田憲一郎氏が日本へ紹介し，2007年頃から普及活動を担っている。身近なツールとして代表的なものは，SBAR（Situation, Background, Assessment, Recommendation & Requestの略；医療者チーム間でのコミュニケーションにおいて，どういった要素を伝えると効果的かを明示したコミュニケーションツール），チェックバック（復唱），２回チャレンジルールなどがある。しかし肝心なことは，これらのツールにとらわれることなく，まずはメンタルモデルを合致させることにある。

**3）メンタルモデルへの介入に関する研究**

中嶋，相模（2020）は，社会人の男女を対象に，漠然とした失敗への恐怖を軽減することを目的とし，メンタルモデルへの介入を試みている。その結果，失敗に対する恐怖の軽減だけでなく，生き方や自分自身への満足感といった自己受容の高まりがみられ，それらは緊張–不安・混乱といったストレス感情の軽減にも効果があり，１カ月後も継続していたことを明らかにした。

## Ⅴ．考　　察

### １．メンタルモデルに影響を与えるものに関する研究をふまえて

北島ら（2008）は，不適切なメンタルモデルが適用されている場合に，適切だと思い込むことで，新たな情報取得を行わないことを指摘した。このことから，「厳しくしないと育たない」という不適切なメンタルモデルを指導者が有している場合，現代の若い学生たちとの関わり方などの情報を研修等で得たとしても，それが新たな認識として定着されない可能性が推察された。よって，まずは自身が，どのようなメンタルモデルを有しているのかについて，仲間との対話を通して俯瞰できる機会をもつことが重要だと考える。というのも，指導者の指導行動は，自身が受けた教育経

験や様々な生活体験，他者との関係に影響されることが報告されているためである（馬場ら，2021）。

看護教育におけるこれまでの研究では，教員と臨床指導者ではそれぞれの経験と役割にひきつけた指導をする傾向がある（柴田，川本，2018）ことが明らかにされている。また，教材化に関する研究では，教員と指導者は，教材化としての現象の捉え方は一致していたが，その場面で伝えた内容は一致していない（島田，高島，2008）ことが報告されている。これらの研究結果は，たとえ教育目標を共有していたとしても，学生指導においては，それぞれの経験によって異なるアプローチがなされており，教員や指導者が実施する学生指導にはメンタルモデルが関与している可能性が示唆される。

それでは，どのようにメンタルモデルを育てるとよいのだろうか。上山ら（2020）は，保育者が子ども理解のメンタルモデルとして３つの認識枠組みを有していることを明らかにしている。看護においても，指導者がどのような認識枠組みを用いて学生や新人を理解しているかを明らかにすれば，認識枠組みを用いた対象理解の訓練が可能となり，適切なメンタルモデルの育成につなぐことが期待できる。

また，メンタルモデルの育成においては，先述した認識枠組みの他に，土井ら（2012）が明らかにしたメンタルモデル構築の７つの要素（プランニング，状況の理解，概念の形成，メタファ，フィードバックの検討，システムの振る舞いの予測，システムの要素間の相互作用）も含められると効果的になると思われる。そのためには土井ら（2012）の研究にもあるように，状況設定を行いロールプレイやシミュレーションを用いて，指導者には思考発話をしてもらいながら訓練することが望まれる。

さらに，池田（2012）の研究によると，チーム力は直接的にチーム・パフォーマンスに規定されるだけでなく，チーム・メンタルモデルの形成を促進し，チーム・メンタルモデルが形成されることで，チーム・パフォーマンスの向上にもつながっていることが明らかとなった。このことから，学生や新人にとってより良い学習環境を整備するためには，個々の指導者の育成にとどまらず，チーム・リーダーシップの育成やチーム力の育成も並行して取り組む必要性が示唆された。

## ２．メンタルモデルの共有／チームのメンタルモデルに関する研究をふまえて

村上（2017）は，それぞれの看護師が抱く無形のメンタルモデルを言語化し，パスに有形化して共有することが専門性の共有となることを述べている。指導においても同様だと考える。それぞれの看護師が抱く指導に対する無形のメンタルモデルを言語化できる機会をつくり指導案の作成ができれば，チームで取り組む専門性の高い指導の継続が期待できる。

また，言語化することは，自身のメンタルモデルを俯瞰する機会にもなる。教員や臨地実習指導者，臨床の看護師は，臨床指導者講習会や様々な教育活動への関わりを通して，自分の持っていた学生観や教育観に気づく機会がある。その機会は，従前の教育観や指導観が問い直され，修正され，変容することが報告されている（濱田，志田，2010）。P. Sengは，振り返りの基本は「口で言っていることと，実際の行動との乖離を捉えること」（P. センゲ，2011，p.260）であり，振り返りが，メンタルモデルの学習の真髄だと述べている。反省的実践家を提唱したD. ショーンも，専門家が暗黙のうちに持っている自らのフレーム（認識枠組み）に気づくことを「フレーム分析」と呼び，行為の中で省察することを助けると述べている（D. ショーン，2007）。これらのことから，研修会や教育活動への参加は，指導に携わる人が自ら指導場面を振り返り，自身のなかに潜むメンタルモデルに気づき，それを適切に修正することで，より良い教育活動への動機付けになることが予想できる。

個人の教育観と並行して押さえておきたいのは，組織の教育観である。中井（2023）は，「学習者が職場に適応し，長期的に働けるよう導くためには，組織の教育観にも配慮することが必要」

(p.64-65）と述べている。教育観や学生観は，まさにメンタルモデルの１つである。研修等の機会などを通して，組織の教育観に触れる機会をつくり，自身のなかに潜む“個人の教育観や学生観”と照らし合わせながら調整を図る機会を持つことができれば，独り善がりの教育から脱することができ，学習者が長期的に働ける職場づくりにつながることも期待できる。

### ３．メンタルモデルへの介入に関する研究をふまえて

中嶋，相模（2020）の研究によって，メンタルモデルへの介入によって漠然とした失敗への恐怖は軽減することが明らかとなった。新人看護職は，失敗するかもしれない，医療事故を起こすかもしれないという漠然とした恐怖心を抱えており，それが離職の原因の１つになっている（内野，島田，2015)。これらのことから，新人看護職研修のなかにメンタルモデルへの介入を試みストレスの軽減を図ることが可能となれば，離職予防につながることも期待できる。また，同様に指導者も自信がないままに指導に携わっている現状がある（山川，宮里，2023)。よって，指導者を対象にしたメンタルモデル介入研修を実施し，学生や新人を支える指導者側の不安を軽減することで，指導者も学習者も安心して学べる環境の整備につながることが期待される。

## Ⅵ．まとめ

メンタルモデルについて文献検討を行った。まだ研究としては，十分な開拓がなされていない領域であることが明らかとなった。メンタルモデルの育成には，他者との対話を通して言語化を図り，自身を省みる機会が必要であることが示唆された。また，指導者のメンタルモデルを明らかにして指導者育成プログラムのなかに反映させると同時に，チーム・リーダーシップやチーム力の育成についてもトレーニングをすること，組織の価値観にも触れる機会を設け，ロールプレイやシミュレーションを通してメンタルモデルの変容を促すことで，豊かな学習環境の整備につなぐことが示唆された。

**研究助成**

本研究は，文部科学省科研費・基盤研究（C）「看護教員・臨地実習指導者のための発問力向上シミュレーション教材の開発」（23K09841）の助成を受け実施した。

**利益相反**

本研究における利益相反は存在しない。

**オーサーシップ**

すべての著者は研究の着想，および文献収集，文献の分析および草稿の作成に携わった。すべての著者は最終原稿を読み，承認した。

## 引用文献一覧

馬場好恵，本田可奈子，中西京子.（2021）．看護基礎教育の臨地実習における実習指導者の持つコンピテンシー．日本看護研究学会雑誌，44(2)，285-297.

土井俊央，冨永彩容子，山岡俊樹，西崎友規子.（2012）．操作時のメンタルモデル構築要素についての一考察．デザイン学研究，58(5)，53-62. https://doi.org/10.11247/jssdj.58.5_53

Donald A. Schön，野口裕二，佐藤学（監訳）.（2007）．省察的実践とは何か―専門家としての行為の中の省察（pp.112-113）．東京：鳳書房.

濱田美香，志田美保子.（2010）．臨地実習指導者講習会を通しての教育観・指導観の変容．日本看護学教育学会誌，20(1)，31-38.

池田浩.（2012）．チーム・メンタルモデルおよびチーム・パフォーマンスを規定する要因に関する検討：チーム力およびチーム・リーダーシップの効果，福岡大学人文論叢，44(2)，293-309. https://fukuoka-u.repo.nii.ac.jp/records/1144

北島宗雄，熊田孝恒，小木元，赤松幹之，田平博嗣，山崎博.（2008）．高齢者を対象とした駅の

案内表示のユーザビリティ調査．人間工学，44(3)，131-143．https://doi.org/10.5100/jje.44.131
松本順，大井康史，佐藤公亮，森村尚登.(2019)．救急医療に必要なノンテクニカルスキルの類型化．日救急医会関東誌，40(3)，242-245．https://doi.org/10.24697/jaamkanto.40.3_242
盛田英司.(2024)．医療安全管理者から見た現在の医療安全．日本小児科医会会報，68，30-31．https://x.gd/Zl6tu
村上成明.(2017)．看護師がクリティカルパスを理解していく過程とナレッジマネジメントの関連性．日本ヒューマンケア科学会誌，10(2)，18-28．https://doi.org/10.50922/jjahcs.10.2_18
中井俊樹（編著）.(2023)．第2版 看護現場で使える教育学の理論と技法（pp.64-65）．大阪：メディカ出版．
中嶋美知，相模健人.(2020)．NLPのメンタルイメージと知覚位置を用いた，失敗恐怖軽減と自己受容の改善研究．ブリーフサイコセラピー研究，28(2)，50-60．10.20748/jabp.28.2_50
仲田紀彦，侭田敏且，早坂豪，伊藤直美，橘知子.(2017)．頚椎椎弓形成術クリニカルパスの運用上の問題点と解決策．整形外科，68(11)，1141-1146．https://doi.org/10.15106/J00764.2018005471
錦見美貴子.(1988)．用語解説 メンタルモデル．人工知能学会誌，3(2)，229．https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjsai/3/2/3_229/_pdf
新田京子，深見睦子，竜崎千明，横井典子，高柳昌子，宮木良美，芹沢麻里子.(2015)．周産期チームのチーム力を高める試み．浜松医療センター学術誌，9(1)，86-88．
小野澤康子，吉岡菜緒美，神林政子，登坂香，田村太子，川口緋沙子.(2000)．臨床看護の場におけるインシデントの実態と発生要因の検討．新潟県立看護短期大学紀要，6，71-90．
Peter M. Senge（1992）. Mental models. Planning Review，20(2)，4-44．https://doi.org/10.1108/eb054349
ピーター・M・センゲ，枝廣淳子・小田理一郎・中小路佳代子（翻訳）.(2011)．学習する組織ーシステム思考で未来を創造するー（pp.41，241），東京：英治出版．
柴田恵子，川本起久子.(2018)．看護学実習における生命倫理教育内容の教材化　実習指導経験からの内容分析，九州看護福祉大学紀要，18(1)，29-39．https://ndlsearch.ndl.go.jp/books/R000000004-I030328346
島田悦子，高島尚美.(2008)．看護学臨地実習における教材化の教員と臨床実習指導者との比較ー周手術期臨地実習場面のVTRを視聴してー．日本看護学教育学会誌，17(3)，15-23．https://doi.org/10.51035/jane.17.3_15
内野恵子，島田涼子.(2015)．本邦における新人看護師の離職についての文献研究．心身健康科学，11(1)，18-23．https://doi.org/10.11427/jhas.11.18
上山瑠津子，杉浦伸一郎.(2020)．保育における子ども理解のメンタルモデル．質的心理学研究，19，175-193．https://doi.org/10.24525/jaqp.19.1_175
山川和歌子，宮里智子.(2023)．先輩看護師が日々の業務の中で感じる新卒看護師への指導の困難と対処．沖縄県立看護大学紀要，24，1-14．https://x.gd/vcfad